

『対魔忍』 閃光のフラッシュ

100000

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

閃光のフラッシュユっているじゃないですか？自分あのキャラワンパンマンの中でもガロウの次くらいに好きなんですけどあの姿にどこか見覚えがあつたんですよ。

ピッチリスーツ

中性的な顔立ち

高いプライド

忍び

あ、対魔忍だ。

目次

模擬戦	1
最強の対魔忍	14
あの人は俺の『兄貴』	23

模擬戦

20XX年、世界には人間だけでなく人ではない魑魅魍魎が影で跋扈ばっこするようになっていた。

彼らはこの地球で生まれた生物ではない。魔界、そうつまり魔物である。

そしてここ、東京も例に漏れず人ならざる者が影で暗躍する第二の魔界と化していた。

その中、人もただ指をくわえて見ていたわけではない。魔に与する者もいる中、その魔に対抗する者も現れた。

人は彼らを『対魔忍』と呼んだ。

「全員集合したな。今日は新学年初の模擬戦だ」

時刻は日も高く登り始めるところ。校庭には複数の人間が、列をなして並んでいた。

その列に注目される形で彼らの目の前に立つのは一人の若い女性だ。

彼女の名は八津やっつ 紫むらさき、青いロングヘアに豊満な体、モデル顔負けの美貌、とまるで美女の象徴かのような姿だが、ただ注意するとすればその表情は虎も射殺しかねないほどに鋭い目つきをしていること、そしてその足元にはとても女性一人が持つにはあまりにも大きすぎる戦斧が突き刺さっていることか。

そして紫は目の前に自信満々に座る生徒に厳しい目を向けながら今日の模擬戦の内容を語る。

「お前たちには早速模擬戦を・・・と言いたいが、何事もまずは手本、目指すべき目標を見てもらう」

紫の言葉に口にはしないものの何人から笑みが零れる。無論、紫はそれを逃しはしなかったが、あえてそれを見逃す。

紫の目的はその鼻っぱしをへし折ることにあるのだから。

ここは五車学園、魔に仇なす者『対魔忍』を育成する機関。

ここに集められたのは今年五車学園に入学した新入生だった。無論そこには落ちこぼれもいればエリートもいる。

エリートである者には対魔忍の厳しさを、落ちこぼれには自分がまだ雛鳥であることを教えるために。

『紫先生、では誰と誰が模擬戦するんですか？』

生徒の誰かが紫へ質問する。その場にいた誰もが模擬戦を実演する者が誰なのか気になっていた。

『無論、ここにいる中で最も優秀な二人だ』

『優秀』その言葉に何人かの生徒が反応する。プライドが高い彼らは自分こそが優秀であるという自負があるからだ。

『まずは・・・私だ』

紫が示したのは自分自身だった。この場にいる者であるなら紫自身も含まれる。ゆえに紫が自分を指名することは可能だった。

『・・・・・・・・』

それに文句を言う生徒はいなかった。その中には不満を持つ者もいたが、納得はしていた。

八津 紫、『最強の対魔忍』と呼ばれる井河 アサギに次ぐ実力者と学園では名高いからだ。

せめて、紫先生の次には・・・と生徒たちも内心意気込むが紫が指名したのは別の人間だった。

『来い、フラッシュ』

紫は視線を飛ばす。生徒たちの後方へ。

その場にいる全員が振り返る・・・が、

そこにフラッシュと呼ばれた者はいなかった。

『どこを見ている？』

『!!』

バツとまた振り返る生徒たちの目の前には女性のように長く背中まで垂れた髪に凛々しい顔立ち、性別を見間違えそうな容姿の『男』が

いた。

身体に張り付いた対魔スーツに足まで伸びたマントをなびかせ、細長い太刀を背負った・・・対魔忍だ。

「・・・・・・・・ふん」

新入生を一瞥いちべつしたフラッシュは鼻で笑わう。

「新入生とはいえこの程度か・・・」

『!!』

明らかな挑発に一気に不機嫌になる新入生一同。中にはフラッシュをよく知る者もいるのかヤレヤレといったジェスチャーをする者もいる。

だが、フラッシュと呼ばれた男にはそう言えるだけの理由があった。

「俺は今、お前たちが振り向くと同時に前の方に回り込んだ・・・気づいた人間はいるか？」

フラッシュの問いかけに答えられる生徒はいない。そもそもフラッシュが語った言葉にまだ疑問符を浮かべる者すらいる。

「・・・・・・・・いないのか？ならば——」

貴様たちが抱いていた自信はただの驕おごりだったということだな」

フラッシュが新入生達を鼻で笑ったのは至極単純な話、大した実力も無いのにさも強者のように振る舞う生徒たちが滑稽に見えたからだ。

「そう言うなフラッシュ。お前のスピードについていけるのはこの学園ではアサギ様くらいしかおらん」

「ふん、あの女も俺に追いつくことは出来ん。そもそも紫、貴様も俺からすれば有象無象の一人に過ぎん」

「・・・・・・・・ほう？」

ピリつく生徒たちの雰囲気を一気に吹き飛ばすように辺りを濃密な殺気が充満する。

「どうやらここで一度上下関係というものを分からせておく必要があるようだな」

額に血管を浮かべる紫を止められる者はこの場にはいない。という

より止めたいとすら思っていないのだろう。

紫から放たれる尋常ではない殺気。それを真正面から受けながら依然表情を崩さないフラッシュ。この後の光景が彼らにはすぐに想像できた。

「……さあ、模擬戦を始めるぞ。お前たちしっかり見ておけよ」

一応教師としての理性は残っていたのか生徒たちに呼びかける紫。きつとそこには生徒たちに毅然としたお手本を見せる姿が……あったのだろう。

当の生徒たちは巻き込まれないようにいつの間にかグラウンドの端に全員移動しており、紫の言葉など聞いていなかったが。

「……紫、分かっていると思うが」

「……ああ分かっていると——」

殺す！」

フラッシュの問いかけに紫はいい笑顔殺意で返した。

「……おい——」

フラッシュを何かを言いかけたが、その言葉は紫が振り下ろした戦斧が大地を割った音で消えていった。

まるで爆発が起こったかのような音、衝撃。およそ爆心地にいた者は肉片も残さぬような破壊がそこにはあった。

「全く……相変わらずの力馬鹿だな」

しかしその爆心地は既にもぬけの殻で、残っていたのは紫の背後に回ったフラッシュの皮肉を込めた言葉だった。

「ハアアア!!!」

フラッシュの存在を確認する間もなく紫は戦斧を後方へ振り回す。しかしフラッシュはそれをしゃがみこむ事で回避する。

「死ねええええええ!!!」

この男を必ず殺すという意志を感じさせる紫の怒号、そして凄まじい速度で振り回される戦斧。

これは模擬戦ではなかったのか?という疑問が生徒たちの心の中に芽生えたが、それ以上にその闘いのレベルの高さにもはや尊敬すら感じ始めていた。

絨毯爆撃でも起こっていると錯覚するように連続する爆発音。そしてその爆心地の中を駆け抜ける白い風。

「いつまで逃げ続ける!!!」

「その言葉は俺を捉えられるようになってから言うんだな」

「抜かせえ!!!」

フラッシュの挑発に紫も速度を上げる。斧を振り下ろした衝撃だけでもグラウンドを駆け抜けるほどの攻撃が無数、フラッシュへ降り注ぐ。

もはや舞い上がる砂埃にグラウンドの中がどうなってるのか生徒たちには視認できなくなっていた。ただ分かるのはいまだ鳴り続ける爆音。少なくともこれが収まるまでは戦いが終わることはないだろう。

「うおおおおお!!!」

そんな中、今日一番の紫の大声が響き渡る。それと同時にまた今日一番の爆発が、砂埃すらも吹き飛ばす。

『うお!!』

『キャ!!』

あまりの衝撃波に生徒一同も身構えてしまう。

そして砂埃が晴れたグラウンドには一人の女が立っていた。

「チィ・・・どこに行った!?!」

紫だ。紫はしきりに辺りを見回している。生徒たちも気づく、フラッシュ先生の姿がないと。グラウンドは隕石でも降り注いだかのようにクレーターだらけで荒れに荒れていたが、確かにその場にいるのは紫一人でフラッシュの姿が見当たらない。

「まさか逃げたのか!?!」

「逃げる? そんなこと言うとはお前も随分ボケたな、紫」

「!?!」

いつの間にそこにいたのか、瞬間移動でもしたのか、様々な思考が紫の頭を駆け巡るがそれよりも先にフラッシュを迎撃するために身体を動かす。

「遅い」

一閃、フラツシユの拳が紫の腹へと突き刺さる。そのまま紫は身体をくの字に曲げながら生徒たちの方へ吹っ飛んでいく。

「がああああああ!!!」

大斧を地面に突き刺し、無理やり体勢を整える紫。その腹は痛々しい程に凹んでいた。だが、それも次の瞬間には何事も無かつたかのよう^に再生する。

「『不死覚醒』、相変わらずの耐久力だな」

『不死覚醒』、それは八津 紫の代名詞とも言える対魔能力である。その真価は超再生能力にある。これにより紫は頭と心臓を同時に潰されない限り何度でも再生し続ける。

悠然と紫へ歩を進めるフラツシユ。ここで生徒たちはあることに気づく。

(まだカタナを抜いていない?)

フラツシユが背中に背負った細身の太刀。長刀であるゆえにとても抜刀には向いていない。それがいまだ鞘から抜けていない。それはつまりフラツシユがまだ得物を手にしていないという何より証拠だった。

「ナメるなよ、貴様なんぞすぐに肉塊にしてやる!」

「……お前は頭に血が上りすぎるな」

「なんだと!?!」

あまりにも簡単に激昂する紫にフラツシユが呆れた言葉を口にするが、それにすら紫は反応する。生徒たちは思った、確かにそうだと。「馬鹿にするな! いつまでも得物を手にしないその余裕、私がへし折ってやる!」

もはや模擬戦という『名目』は紫の中には存在してなかった。既に彼女の頭の中にはどうやってフラツシユの鼻っばしをへし折ってやろうかという思いのみだった。

そんな紫を見て、フラツシユは一言。

「……馬鹿だな」

ブチッと何かが切れる音を生徒たちは確かに聞いた。

それが紫の堪忍袋の緒だったのか、それとも理性だったのか、それ

が分かったのは・・・フラツシユを除いた全員だった。

「でえええええやあああああ!!!」

血走った目でフラツシユに突進する紫。もはやイノシシとでも形容するべきか。己を忘れ、ただ真っ直ぐ突っ込んでくる獣に『閃光』のフラツシユが遅れをとるはずがなかった。

大きく斧を振りかぶる紫。

仕掛けたのは・・・フラツシユだった。

斧を振り上げた紫の両肩、正確にはその付け根に目に止まらぬ速さで二閃。

関節の隙間を狙った貫手は正確にヒットし、紫の肩関節を外す。しかし、紫の『不死覚醒』はその程度の傷は一瞬で完治する。

そう、『一瞬』である。

それだけの時間があれば決定打を決めることも可能である。

「閃光脚」

生徒たちは思った。あまりにも速すぎる攻撃は本当に光のように見えるのだと。

一瞬、止まった紫の背後に回ったフラツシユはまさに閃光の如きスピードで蹴りを放った。

紫は己が蹴り飛ばされたという事実を認識したのは自分が吹き飛ばされ、グラウンドに叩きつけられた後だった。

大ダメージにも関わらず、『不死覚醒』によりすぐさま起き上がる紫だがフラツシユは既に仕掛けていた。

「カッ・・・!!」

フラツシユの腕が紫の動脈を締め付ける。起き上がった紫の背後から動脈を押さえることで一瞬で紫の意識を落とす。いくら再生するといえど、外傷のない攻撃には無意味だった。

「・・・まったく」

紫の意識を落とした後に周りを見渡すフラツシユ。荒廃したグラウンドに、ポカンとした表情の生徒たち。もはや模擬戦とは何だったのかという感じだが。それでもフラツシユは『任務』を遂行する。

「全員集合だ・・・早くしろ、俺を待たせるな」

その言葉に生徒たちはビクツとし足場が悪くも素早く最初の隊形に整列する。

「さて、模擬戦・・・と言ったが今の戦いに貴様たちは何を感じた？」
『・・・・・・・・』

フラツシユの言葉に生徒たちは一同に顔を見合わせる。何を感じたと言えば、尊敬、畏怖、そして強さへのあこがれだった。

「・・・模擬戦はあくまで模擬だが、実戦だ。一步間違えば死ぬ・・・だがそれは実戦でも同じだ。殺し合え、とは言わん。だがやることはその実、殺し合いだ。それを覚えておけ」

それを言うフラツシユは踵を返し、校舎の方へ帰っていくフラツシユ。
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

後に残されたのは呆然と立ち尽くす生徒たち・・・と、白目を剥く紫先生。

『・・・と、とりあえず紫先生を起こそう。土遁が使える人はグラウンドの整備を』

この時、声を発したのはある一族の生き残りで落ちこぼれと言われた男だったが自称エリート達も今は特に何も言うことなく指示通りにグラウンドの整備をした。

フラツシユ side

俺には憧れのキャラがいる。それはワンパンマンという漫画に出てくる『閃光』のフラツシユというキャラクターだ。

憧れた理由は色々あるが一番カッコイイと思ったことは超スピードを活かした戦闘スタイルだ。

もし生まれ変わる機会があったならそのフラツシユのようになりたいと何度も思った。

そしてそれは突然訪れた。

深夜にコンビニに車を走らせている時、赤信号なのに突っ込んできた車に俺は殺された。

だが、気づくといつの間にか子どもで俺は違う人間へと変わっていた。

事態を把握するまでに時間を要したが、落ち込んでばかりは居られないと俺は自分を鼓舞させた。

俺に勇気をくれたのは何を隠そうこの世界の『特殊性』だ。

どうやらこの世界には『対魔忍』という忍びがいて、なんと忍術や異能力を使って、魔の者と日夜戦っているというのだ。

この世界なら俺の『憧れ』になれる。だから俺は・・・もう一度立ち上がった。

と、意気込んで早二十年、気づけば俺もいい歳になり、対魔忍職業も板につき、ここ五車学園で特別教師というのを任されるようになった。

そういえば今日は新入生が初めての模擬戦をするらしい。紫先生が担当するらしいが、どうやら最初ということもあり、模擬戦のお手本としてご指名を貰った。

少し俺に当たりが強い所があるが、それは元来の気の強さがそうさせてるだけで根はしっかり優しい人だ。こんな殺伐とした世界でも仲間は絶対に見捨てないという強い意志も正直尊敬すらしている。

そういえば俺を指名した時に「期待している」と言っていたな。さくら先生でも良かったろうになぜ俺だったんだ。

さて、今日もフラツシュになりきってみせるか！

・・・・・・ムフフフ、驚いてる驚いてる。新入生全員どうやら俺の超スピードについてこれなかったようだ。

ここまでは紫先生と打ち合わせた通り。さて、生徒たちにもフラツシュ様のカッコ良さを見せつけてやろう。

「・・・ふん。新入生とはいえ・・・この程度か」

まるで相手が自分より下であることを確信しているかのようにならから目線で話す。これぞフラッシュ様、自分が最強という自信に満ち溢れている！

「俺は今、お前たちが振り向くと同時に前の方に回り込んだ・・・気づいた人間はいるか？」

答える生徒はいない、そりやそうだ。この数十年間、異能とかの特訓をせずにひたすら速さを求め続けた俺をそう簡単に捉えられと思うなよ？

「・・・いないのか？ならば――

貴様たちが抱いていた自信はただの驕りおごだったということだな」

ドヤアアアアア!!!

「・・・さて、生徒の対抗心を煽るのはこれくらいでいいかな？

「そう言うなフラッシュ。お前のスピードについていけないのはこの学園ではアサギ姉様くらいしかおらん」

「は？アサギさんですら俺のスピードについてこれないぞ？俺フラッシュ様ゾ？何言ってるの？」

「ふん、あの女も俺に追いつくことは出来ん。そもそも紫、貴様も俺からすれば有象無象の一人に過ぎん」

「・・・ほう？」

「・・・あ、そういえば紫先生に関してアサギさんは地雷だった。

「一気にピリつく紫先生。そういえば昔もよくこうして紫先生は頭に血が上って周りが見えなくなっていたな。」

「・・・さあ、模擬戦を始めるぞ。お前たちしっかり見ておけよ」

「おお、めちやくちや額に血管浮かんでるけどしっかり教師としての面目を保ってるじゃないか！・・・え、大丈夫だよね？」

「・・・紫、分かっていると思うが」

「・・・ああ分かってるとも――

「殺す！」

「相互理解って知ってる？」

グラウンドに駆け出し、紫先生の背後に回り込む。

「まさか逃げたのか!？」

だから逃げてないって。

「逃げる? そんなこと言うとはお前も随分ボケたな、紫」

「!？」

振り返る紫先生のお腹にパンチを放つ。それもただのパンチではない。フラッシュ様になりきるために今まで鍛えに鍛えた脚の馬力を載せたパンチだ。まず常人がくれば間違いなく死ぬ。

案の定、紫先生は吹っ飛んでいくが彼女には『不死覚醒』がある。これくらいでは死なない。ほら、やっぱり耐えた。

『不死覚醒』、相変わらずの耐久力だな」

羨ましい能力だけどフラッシュ様には必要ないな。

「ナメるなよ、貴様なんぞすぐに肉塊にしてやる!」

もはや紫先生は目が血走り始めている、怖いんだが。てかそういうところ尊敬するアサギさんにも注意されてたじゃん。

「……お前は頭に血が上りすぎるな」

「なんだと!？」

あ、また怒った。

「馬鹿にするな! いつまでも得物を手にしないその余裕、私がへし折ってやる!」

……いやいや俺のこの細身の太刀で打ち合ったらこっちの得物が確実に折れるでしょ? ……あ、そういうえばアサギさんは普通に打ち合っていましたね。さすが『最強の対魔忍』。

「……馬鹿だな」

「でえええええやあああああ!!!」

突っ込んでくる紫先生の動きを斬撃を二発の打撃で止めて、後ろに回り込む。さあくらえ、フラッシュ^俺の技を……!

「閃光脚」

現時点、最速の蹴りをおみまいする。もっともこれも『不死覚醒』の前では決定打にならないんだよな……。

閃光脚で吹っ飛んだ紫先生の後ろに回りこみ、腕で動脈を押さえ、

意識を刈り取る。

「カツ……！！」

「……まったく」

……ふう、ようやく収まった。もう慣れたけど昔はよく喧嘩したものだ。その度にアサギさんに怒られてたっけな？

あ、完全に生徒たちを置いてけぼりにしてしまった。紫先生……は俺が落としちやったし。……しようがない。

「全員集合だ……早くしろ、俺を待たせるな」

俺の言葉に生徒たちは素早く整列する。お、結構言うこと聞いてくれている？まあ、これなら模擬戦をしたかいがあつたな。

「さて、模擬戦……と言ったが今の戦いに貴様たちは何を感じた？」

『……』

とりあえず今回のまとめに入ろうと思う……が何を感じたかと言えばくだらない大人の喧嘩だよな。……いいや、それっぽくまとめよう。

「……模擬戦はあくまで模擬だが、実戦だ。一步間違えば死ぬ……だがそれは実戦でも同じだ。殺し合え、とは言わん。だがやることはその実、殺し合いだ。それを覚えておけ」

……よし、とりあえずいい感じにまとめたな。紫先生も起きると思うし俺は去ろうかな。

……このままだと、俺もアサギさんに怒られようだし。

最強の対魔忍

最強の対魔忍とは誰か？

その問いに多くの人は『井河 アサギ』と答えるだろう。少なくともその評価に偽りは無い。実際彼女の戦闘能力は一騎当千の多い対魔忍達の中でも群を抜いている。

だが、その井河アサギ本人は違う人の名を口にする。近くで『彼』を見てきたからこそアサギは絶対の自信を持ってその男の名前を呼ぶ。

「フラツシユ」

「なんだ？」

時刻は昼過ぎ頃、フラツシユは模擬戦を終えた後どういう訳か校長室に呼び出されていた。今のフラツシユは戦場を離れ、教師をしている。教師であるならば校長室に来ることもある。それ自体はなんらおかしいことではない。

おかしいことがあるとすればフラツシユを呼んだ妙齢の女性の額に青筋が浮かんでいることか。

「今日って模擬戦のはずよね？」

「そうだが？」

圧をかけるような女性の問いに、毅然と返すフラツシユ。女性の聞き方的に明らかに何か問題があったことは間違いないのだが、フラツシユの表情は崩れることは無い。むしろ、何が問題なのか分からないと言った様子だ。

そんな様子を見せられた五車学園校長『井河 アサギ』は・・・当然キレた。

「どうして模擬戦でグラウンドがあんなにめちゃくちゃになるの!？」

「あれは俺ではなく紫のせいだ。俺はあんな力任せな攻撃はしない」

「・・・当の本人は白目剥いて倒れていたらしいじゃない」

「当たり前だ。俺と戦って勝てるわけないだろ」

「そういうことを言いたいんじゃないの・・・」

フラッシュのある意味堂々とした態度に頭を抱えるアサギ。いつそのこと嘘だと言って欲しかった。でも、嘘ではないのだ。

生徒の模範として模擬戦を行った・・・それはまだ分かる。アサギとしても生徒の手本となるならそれが一番効率的だし、メッセーj性も強く良い案だと思っている。だが、実際の結果はグラウンドはボロボロ、紫は気絶、模擬戦の相手をしたフラッシュは逃走、拳句の果てにはグラウンドを元に戻したのは残された生徒たち。これが授業だと言うからにはやお笑いである。

「・・・あなたの実力は買ってるわ」

「当然だ」

「あなたがそこに立つまでに凄まじい努力をしてきたことも含めてね」

「・・・」

フラッシュが先生に向いているかと言われるとアサギとしては首をひねる自信はある。むしろ彼は現場でこそ生きるタイプの対魔忍だ。だが、彼が誰よりも努力したということは知っている。

その姿勢、自己鍛錬に対する厳しきで生徒たちを刺激したいからこそ頭を下げてお願いしたのだ。

「無理に生徒に合わせなくていいわ。でも最低限、生徒を導くことはしてちょうだい」

「・・・善処しよう」

アサギの誠意がこもった言葉に流石に悪いと思ったのかフラッシュも顔を背けながらも肯定する。

フラッシュとしても今回のことに関しては自分にも落ち度があることを心の底では思っているのだろう。

(でもプライド高いから・・・絶対言わないわよね)

なぜフラッシュが己の非を認めないのか、それはある意味対魔忍らしくもあるプライドの高さが原因だった。そして長くフラッシュと共に戦ってきたアサギはいい加減フラッシュのそういうところを理解していた。

もつともプライドが高いのはアサギも同じなのだが。

だからこそ、彼を説得する手段など始めから決まっていた。

「さて、この後時間空いてるかしら？」

「なんだ？ 雑用なら引き受けんぞ」

「ふふ、ちよつとした訓練よ？」

フラッシュに向ける熱い視線。それが昔から何を意味しているのかフラッシュにも理解出来たし、むしろ彼自身も燃え上がった。

場所は変わって、五車学園の地下にある特別修煉場。ここではあらゆる敵、場所、はては気候までもバーチャルによる仮想空間でシミュレーション出来る訓練施設だ。

その中でも特に広く、大きい一室に向かい合うのは二人の男女。

男の方は黒い対魔スーツに白いマントを羽織り、片手に身の丈に届きそうな程長い太刀を握りしめている。

もう一人、女性の方は男と同じようにピッチリと肌に張り付く白い対魔スーツを身にまとっており、豊満なボデーラインがくつきりと表れている。そしてその腰に小太刀を二本携えている。

「ん、お姉ちゃんもガチだね」

そんな二人の様子を管制室からモニタリングするのは、井河アサギの妹、井河さくらである。

姉のアサギが本気で挑む時の対魔衣装を身にまとっていることにはさくらは姉のマジ具合を感じていた。

「・・・アサギお姉様が模擬戦をすると聞いたが、こういうことか」

「あ、むっちゃん！」

管制室に入ってきたのは先程、目が覚めたという八津 紫だった。(一応)気高い紫に『むっちゃん』という愛称を付けるのはこの学園ではさくらくらいなものだろう。

「・・・むっちゃんはやめろ」

人懐っこく近寄るさくらだが機嫌の悪い紫は拒絶する。当然と言えば当然かもしれない。なにしろ自分の憧れと対峙しているのはついさつき自分を負かした男なのだから。

「あくそういえばむっちゃん、フラッシュに負けちゃったの〜?」
しかし空気を読まないさくらはそんな紫の様子にお構いなく傷口を抉りにいく。

「・・・ああ負けたな。せつかくだからストレス^反発散^省にでも付き合ってもらおうかな?」

と、そんなさくらに紫は殺気混じりに応える。流石に身の危険を感じたさくらは冷や汗を流しながらピョンと身を引く。

「で、でもあの二人が模擬戦するのはいつぶりだろうね!」

睨みつけてくる紫の気を逸らすためにとりあえず話題を振るさくら。紫は鋭い目つきを変えることなく返答する。

「私が知ってる限りでは数年前に一度・・・喧嘩?だったか、それで白黒つける時にここを使用した」

「喧嘩で・・・血の気多いな〜」

我が姉ながら呆れると言わんばかりに両手を広げるさくら。さくらとしても姉は好戦的な所があるというのは知っていたが、喧嘩で模擬戦になるのは『相手がフラッシュ』だからだろうと思っている。なぜなら――

「お姉ちゃんの相手なんて片手間には務まらないからね〜。そんなこと出来る人なんてフラッシュ以外に知らないもん」

最強の対魔忍、井河アサギと模擬戦。それは聞く人からすれば熱くなるようなことではあるが、仮に対峙することになったら勝つことはまず諦め、どれだけ食い下がれるかに思考がシフトする。

それほどまでにアサギの実力が高いということをさくらはこれまでの闘いでよく知っていた。

高い実力に見合ったプライド、さくらはアサギを密かに自分の目標としていた。

だからこそ最初の一手は予想も付かなかった。

「不意打ち!」

何を言っていたのかは分からないが、明らかに二人は会話をしている途中だった。それにも関わらず、唐突に仕掛けたのは・・・アサギだった。

プライドの高い姉だからこそやるなら正々堂々と勝負すると思っ
ていたからこそ、さくらにはこの攻撃がとても衝撃的だった。

腰に付いている二刀による斬撃。並の対魔忍ならとても避けるこ
とは出来ない攻撃を不意打ちで行う。・・・そんなもの避けられるは
ずがなかった。

もつとも相手は『並』なんてものではなかったが。

アサギの不意打ちにフラッシュは顔色一つ変えずに太刀を抜刀。
アサギの二撃を打ち落とす。

「それだけフラッシュのことを認めているということだ」

アサギの行動の真意を紫が代弁する。もつともその顔は納得いっ
てないという意味がありありと伝わるものだったが。

「アサギお姉様とて忍び。もし自分より強いだろう相手がいるなら不
意打ちの一つくらいするだろう。・・・私の時は一度もなかったのに」
自分がアサギよりも上回っているという考えは微塵もない紫だが、
フラッシュに負けているというのが心の中ではかなり癪しやくだった。

不意打ちから流れるように蹴りを放つアサギとその蹴りをかわし、
そのままカウンターで蹴り出すフラッシュ。

超スピードで修練場中を駆け巡る二人を見て、紫は一層モヤモヤと
することとなった。

「おおくすーいー！」

一方、さくらは二人の闘いに語彙力を失っていた。

「ふふ・・・」

口から自然と笑みが零れる。それが戦闘への興奮なのか・・・それ
とも別の何かか。少なくとも私自身はそれが何か、この刹那の中でそ
んな邪念、理解しようとしてもできなかった。

求められていることはただ一つ。『相手より速くあること』。

会話の中で突如仕掛けた自分らしくない不意打ち。でも、この男な
らその程度容易く対応してみせる。そう信じていたからこその一撃。

案の定止められ、追撃もかわされてカウンターをもらう始末。

私とてここ五車の里では『最強の対魔忍』と呼ばれる程度には強い。だけど打ち合ってみて分かる。スピードが、技が前よりも格段に上がっている。・・・そして自分がそれに置いていかれていることに。

そう、アナタは昔から変わらなかった。

そのスピードでいろんなものを置き去りにしていく。

どんな敵も、如何なる奸計も、あらゆる理不尽も——

そして、私たちも・・・。

「さあ行くわよフラッシュ！もうあなたに置いていかれるのはこりこりよ！」

——『殺陣華』!!!

私がつもつ異能『隼の術』で限界まで引き上げられたスピードにより生み出した分身で敵を粉微塵にする奥義。

普通なら瞬殺、否、『瞬』もいらぬ。だけどきつとこの男は——

「ふ、ふふふふふ・・・あはははははは!!!」

かわし、時には斬り伏せ、私やその分身が作り出した攻撃の全てに対応するフラッシュ。

やはりこれくらいはあいさつ程度。さあ、もっと速度を上げるわよ!

——『光陣華』!!!!!!!

一気に周りがスローモーションになる。周りが遅くなったのではない。私の感覚が極限に研ぎ澄まされ、遅くなったように感じるだけだ。

これが『隼の術』の真髓。限界を超えて引き上げられたスピードはもはや光速にすら到達する。

しかし全てが遅く映る世界で一人だけ、いつも通り動く男がいた。

「フラッシュ!!!」

私はその男にめがけて、最速の突きを放った。

拜啓、昔の俺、小さい頃の俺はとにかく速くなるために走り込んで

いるのかな？

そんなお前に一つだけ警告しておく。

真の敵は『味方』だ。信頼出来る仲間ですらお前に牙を向けることがある。

なぜそんなことを思うのか・・・それは――

現在進行形で命を狙われているからだ。

『殺陣華』、アサギの異能『隼の術』というスピードがめっちゃくちゃ速くなる俺が一番欲していた能力を用いた多重分身波状攻撃をさばくのももう慣れたものだ。何体もの分身が超スピードでこっちに迫ってくるのは並の敵なら、懺悔をする間もなく消え失せる・・・が、俺は違う。

なぜなら、そう『俺より遅いからだ』。

この閃光のフラッシュ様に日に日に近づきつつある俺に速さで勝る者はいない。俺より遅いなら俺に勝つことは決して出来ない――つまり最強、ふふふ。

だが、そんな中でも例外は存在する。それが井河アサギが厳しい鍛錬の果てに『殺陣華』を昇華させた『光陣華』だ。

光――文字通り光の速さになる・・・らしいその速さの過剰供給は一時期は俺すらも凌駕した脅威となっていた。

はつきりいつてそんなもの撃たれたら俺でも勝てない――

そう、昔の俺ならば・・・。

俺とて最強を、フラッシュ様になることを目指す身。その障害となるものがあるならそれを研究し、鍛錬し、乗り越える。

だからこそ分かる――これは乗り越えられる試練だと。

申し訳ないがアサギ、一昔前ならここで終わっていた闘い。だが、もう俺は先にいる。

俺に言わせてもらうのであれば――

「努力が足りんな」

「はあ、負けちゃったか・・・」

修練場で大の字になって寝るアサギ。もはやそんなことをする歳でもないが今回ばかりは気持ち的にヤケになっているため、周りの目などどうでもよかった。

「すっかり鈍ったな。前の『光陣華』の方が速かったぞ」

「・・・これでも鍛錬は欠かしていないつもりだったんだけど」

フラッシュは相変わらずの無表情でアサギを見下ろし、冷静に戦闘の評価を始める。

そんな様子を見て、アサギは悔しがる・・・ことはなく、むしろ昔を懐かしむような顔をする。

「おつかれさまー!」

「お疲れ様です、アサギ様」

ちょうどその二人の間に割って入るように、さくらはフラッシュの方へ、紫はアサギの方にタオルを持ってくる。

「・・・ありがとう」

「不要だ」

それぞれ正反対の対応を示すが、さくらは持ち前の明るさ、そしてフラッシュが『そういう人だ』ということを知っているため遠慮なくタオルを顔に押し付ける。

一方、紫はアサギが使ったタオルをいつ回収しようか思考を張り巡らせていた。とても悪い顔をしている。

「フラッシュ凄かったねー!ズバッと!シユバツて!」

さくらが興奮混じりにフラッシュの速さを絶賛するが、フラッシュは何も答えない。というよりそれが当然だという顔で汗を拭いている。

「・・・さくら、今フラッシュは私と話してるから」

「えー、お姉ちゃんばっかりズルい!私もフラッシュと久々に話したい!」

フラッシュユに詰め寄るさくらに何か思うことがあったのか、アサギがさくらに物申す。しかし当のさくらはそんなことお構いなくフラッシュユに猫のように擦り寄っている。

「……………おい、近いぞ」

「近づいてるからね〜!」

フラッシュユもさくらの行動に抗議するが、さくらは止まることはない。しかしフラッシュユも無理やり引き剥がすようなことはしなかった。

「ちよ、ちよつとフラッシュユから離れなさいよ……………!」

「……………勘弁してくれ」

流石に見てられなかったのか、アサギもさくらとは反対側に陣取る。必然的にフラッシュユは井河姉妹に挟まれる形となる。

「……………キサマア」

親愛なるお姉様であるアサギを取られた紫は、模擬戦以上の殺気をフラッシュユにぶつける。

もはや場も混沌とする中で、フラッシュユは一人思う。

(帰らせてくれ……………)

あの人は俺の『兄貴』

『テメエ、邪魔する気かフラツシユ!』

『邪魔? あいにく弱者の足を引つ張るほど落ちぶれてはいない』

『キサマア・・・!!』

これはまた懐かしい夢だ。俺がまだお母さんの跡をついてくることしか出来ないくらいの頃か。

『これ以上邪魔すんならテメエもふうま一族ごと葬るぞ!』

これは・・・俺の始まりの夢。

数で言えば多勢に無勢。何人もいる対魔忍に対してこっちは小さな俺を抱える同じくらい若い時子。

そして俺たちを守るように彼らの前に立ち塞がる、当時まだ20歳にも届いていなかったフラツシユ兄さん。

『これは驚いた・・・まさか俺より年上が叶わぬ絵空事を言うとはな。そろそろ現実を見たらどうだ?』

『・・・!!』

相手は全員大人の、手練の者ばかり。そんな中この人は引くどころか余裕すら見せている。

『構わねえ、殺れ!』

『逃げて!!』

時子がフラツシユ兄さんに逃げるように叫ぶ。——でも

『なにか言ったか?』

時子の言葉に対して、フラツシユ兄さんが返答する頃にはその場にあった刺客達は全員地に伏していた。

呆気にとられる俺たちにフラツシユ兄さんは告げた。

『走れ。さもななくば置いていくぞ』

——ふうまちゃん!!

「ハッ!」

俺を呼ぶ声に意識が覚醒する。バツと頭を上げ、周りを見渡してみると夕日に教室が照らされ、オレンジ色の反射光に彩られている。

どうやら居眠りをこいたまま、夕方まで寝ていたらしい。昨日、夜更かししてゲームをし過ぎたからなのだろうか。

そして男である俺を『ちゃん』付けで起こしてくれたのは——
「もうー私が起こさなかつたら今頃ふうまちゃん、校舎に一人つきり置いていかれていたよー！」

「ああ、すまない蛇子」

幼なじみの蛇子だった。淡い緑色の髪を揺らしながら、こちらをジト目で睨んでいる。

どうやら蛇子はわざわざ俺を起こしに来てくれたようだ。このまま起こされなかつたら最悪夜の学校を彷徨う羽目になったかもしれない辺り、単純に感謝しかない。

「一緒に帰る約束してたでしょー！」

「・・・あつ」

どうやら俺が約束をすっぱかしてただけなようだ。

「もうー！」

「すまんー！」

頬を膨らます蛇子に平謝りする。しかしこれも仕方ないのだ。朝にあつた模擬戦で『ある意味』心身疲れていたのだ。

「・・・あれ、そういえばふうまちゃん。今日、予定入つてるとか言つてなかつた？」

「予定・・・あ!!!」

蛇子の『予定』と言う言葉にその用事を思い出す。

「ごめん蛇子ー！一緒に帰るのはまた今度なー！」

「あつ、ちよ、ふうまちゃん！」

蛇子には待つてくれていたのに申し訳ない。今度しっかり埋め合わせをしないとイケないな。

そして俺は幼なじみと帰ることよりも大切な予定が入っていたことを思い出した。それは——

「フラッシュユ兄さんとの訓練忘れてたー！」

対魔スーツに着替える時間すらも惜しい。そのまま学生服の状態で校舎の裏山にある訓練場へ急ぐ。

ヤバイヤバイヤバイヤバいいいいいい!!!

「・・・遅い」

「申し訳ありません!」

時刻は同じく夕方。いままさに小太郎が向かっている裏山の訓練場には、一組の男女。片方は目を瞑りながら、待ち人がこの場に現れるのを待っている。もう片方は、その、時間になっても現れない待ち人の従者である彼女は男に本当に申し訳なさそうに謝っている。

「ふん、俺を待たせるとはアイツも偉くなつたもんだな」

「返す言葉もありません・・・!」

待ち人、ふうま小太郎を待っているのはフラッシュだった。そしてそのフラッシュに謝っているのは、黒髪をポニーテールにまとめ、フラッシュ同様対魔スーツを身に纏う麗人だった。

「・・・アイツは昨日の夜は何をしてたんだ、時子?」

「・・・おそらくゲームを」

「はあ・・・」

辺りは五車学園の訓練場というにはあまりにも簡素で、山を切り開いただけ・・・言ってしまうえば広場のような場所だった。

ゆえにフラッシュの小さなため息も時子によく届いた。それによりさらに申し訳なさそうに身を小さくする時子。

「やっぱり私も「すいません!」・・・お館様!」

若い男の声にフラッシュは呆れた顔で、時子は憤怒の顔で振り返る。

「お館様・・・時間を守るのは人として当たり前のことと常日頃言っているはずです。ましてや命の恩人であるフラッシュ様を待たせるなど

——」

「いふ」

やってきた男、ふうま小太郎を早速付き人兼お世話役として叱り始める時子。しかしそれを止めたのはフラッシュだった。

「時間が惜しい、さっさと始めるぞ」

「・・・ごめん」

「分かっているならいい」

小太郎の謝罪の言葉を特に気にすることなく、小太郎から距離をとるフラッシュ。それはこれから始まる『訓練』の始まりを意味していた。

「・・・失礼ながら、やはりフラッシュ様はお館様に甘過ぎるように見えます」

「本当に今回は申し訳なく思ってるよ」

「お館様には家に帰ってから個人的にお話があるので」

「・・・ですよね」

そんなフラッシュの様子に時子は納得がいけないという感じだ。しかし実際フラッシュはそんなこと気にしておらず、むしろ久しぶりに小太郎を見れたことで満足していた。

「よし、始めるぞ」

フラッシュのその言葉に構え始める小太郎と時子の『二人』。フラッシュと一対一の稽古などと甘い考えは二人にはなかった。むしろ二対一でも足りない、そこまでの実力差に気づいているからこそこの布陣だった。

「・・・よろしくお願いします」

「・・・いつでも」

「そうか」

二人が準備を整えるのを見届けたフラッシュは手始めに――

高速移動で二人の後ろをとった。

「後ろだ！」

「はいー！」

そしてそれに反応したのは――小太郎だった。

小太郎から指示を飛ばされた時子は、反射的に背後の気配に向けて回し蹴りをお見舞いする・・・が、既にそこにフラッシュはいなかった。

「ほう、俺のスピードに反応したか。成長したな二人とも」

「いや、フラッシュ兄さんなら初手こうするだろうなとアタリを付け

「ただけさ」

「私もお館様の指示に従ったままでです」

「いや、それでも俺の初撃をかわしたのは見事だ」

(追撃もしなかったのにぬけぬけと・・・！)

賞賛を言うフラッシュに時子は歯噛みする。実際、フラッシュは追撃もフェイントもいくらでも出来たはずをわざわざ足を止めているのだからそうとられても仕方なかった。

「ふ・・・なら、少し上げるぞ?」

そう言つて、またも二人の目の前から消えるフラッシュ。単純に瞬間移動したわけでも、透明化したわけでもなく早過ぎるスピードに動体視力がついていけなかったただけなのだからタチが悪い。

「時子、『目』だ!」

「はい!」

そんな状況でやれることは限られている。小太郎は素早く時子に指示を出す。その声と同時に、時子の目が光り出す。

——『邪眼・千里眼』

時子が持つ邪眼の名前である。その効果は——

「お館様、周囲に目を配置しました」

小太郎達の周囲に目の紋様をした奇怪な模様が多数浮かび上がる。

そしてそれらは全て、時子と視界を共有していた。

「そー!」

時子がクナイを撃ち出す、紋様から。

「ほう、いい反応だ」

撃ち出されたクナイは甲高い金属音と共にフラッシュの剣に叩き落とされる。

「まだまだ!」

今度は一つの紋様からではない。その場に展開された複数の紋様からいくつものクナイが射出される。

しかし、フラッシュも今度はたたき落とすことはせず、滑らかな動きで全てのクナイを優雅にかわす。

「いくぞ、フラッシュ兄さん!」

「ほう？」

そうしてかわしたフラッシュの先には小太郎が待っていた。誘導されたと気づくと同時にフラッシュには別の思いが芽生えていた。

(お前から白兵戦を仕掛けてくるとはな)

忍者刀を正中線に構えた小太郎を見据えるフラッシュ。その顔には油断もなく、焦りもない。しかしそれは——小太郎も一緒だった。

(何を狙っている?)

まだ五車学園の生徒である小太郎と歴戦の対魔忍の中でも最強の一角を担うフラッシュ。そんな二人が打ち合えば、どちらが負けるかなど始めから決まっている。

しかしそんなこと小太郎自身も理解している……だから備えている。

小太郎の聡明さを理解しているフラッシュだからこそ……備えた。忍者刀と太刀、二つの刃が交錯する。

すぐさま、刃を滑らせ、小太郎の懐に潜り込み絶死の一撃を振るうフラッシュ。

「ハア！」

——その二人の間に割り込むように、上からクナイを振りかざしながら落ちてくる時子。

(やはり陽動か)

ちょうど攻撃の対処がしづらい瞬間を狙うような芸当は小太郎には出来ない。むしろ時子が奇襲をかける役割を担うのは当たり前だった。

「あまい！」

だが、そもそも2対1でそれを想定していないフラッシュではない。すぐさま攻撃を中斷、小太郎を蹴り飛ばし時子のクナイを受け止める。

「やああああ!!」

両手にクナイを持った時子は流れるような動きで次々に斬撃を繰り出していく。可能な限り間合いを詰めて、フラッシュの動きを阻害するよう。

刃渡りの長い太刀ではどうしても超至近距離の戦いでは遅れをとってしまふ。ゆえに時子が持つ短いクナイはむしろアドバンテージとなる。

「いい太刀筋だ」

だが、相手はフラツシユ。数多の戦場を駆け抜けた男。それくらいの戦い、幾度も切り抜けてきた。太刀の刃に手を乗せ、器用に時子の攻撃を捌いていく。

「うおおおおお!!!」

打ち合う時子とフラツシユの後方から、フラツシユの蹴り飛ばしから復帰した小太郎が忍者刀を構え走り込んでくる。

「面白い、やってみろ」

フラツシユは小太郎の攻撃を、腰から抜いたクナイで受け止めた。小太郎と時子、二人に挟まれる形となったフラツシユに一切の動揺は無かった。

「くっ!」

「うっ!」

挟み込むように攻めてるはずの二人の顔に苦悶の表情が表れる。それもそのはず、攻めているのはこちらのはずなのに手数で勝っているのは向こうなのだ。小太郎に至ってはもはや防戦一方となっている・・・しかし。

(防御はまた一段と上手くなったな)

むしろフラツシユは小太郎が自分の攻撃を防ぐことが出来るようになってることに驚いていた。

「はっ!」

「ぎゃっ!」

フラツシユの一太刀を受け止めた時子はその威力を殺し切れず、後方に飛ばされる。そうなれば残されたのは小太郎のみ。

「うおっ!?!」

振り向きざまにスピードを乗せた太刀を小太郎の忍者刀に叩きつける。フラツシユのスピードが乗った一撃に小太郎が耐えられるはずもなかった。

「お館様！」

時子は小太郎を案ずる声を発すると同時に『邪眼・千里眼』を発動、追撃させじとクナイを飛ばす。

しかしそれもフラッシュユが一太刀で全て叩き落としてしまった。

(だが、一瞬の時間は稼げた！)

クナイを飛ばす一瞬の間にフラッシュユに肉薄する時子。

「おいおい」

やや呆れた表情をするフラッシュユ。それは彼らの試行錯誤の無さを憂いたものだった。

(さつきと同じパターンか?)

時子の攻撃を捌くフラッシュユは後方に小太郎が起き上がり、構える気配を感じていた。構図としては先程の挟み撃ちと同じ。だから思ったのだ・・・またか、と。

小太郎が後ろから駆け出すのを感じる。

(今日はここまでだな)

同じパターンで自分が倒せるはずはないだろうとこの訓練を終わらせようとした瞬間。

時子が僅かに身体をくねらせた。それが何を意味するのか——フラッシュユは瞬時に理解した。

(これは・・・回避！)

素早く後方を振り向くフラッシュユ。その目の前には、クナイが迫っていた。

クナイの後方、小太郎を見ると腕に千里眼の紋様が張り付いていた。

(小太郎はクナイの注意を逸らすためにあえて飛ばされたのか・・・いや、飛ばされる前提で仕掛けていたのか)

ただクナイを背中に向けて投げたとしてもフラッシュユは気配でそれを感知し叩き落とす。しかし、小太郎から射出されたのでは気配も薄まる。加えて、小太郎はクナイを射出するのに、身動きをする必要は無い。

それがフラッシュユの気配察知をここまで鈍らせたのだ。

目前まで迫ったクナイをフラツシユは無理やり身をよじり、背中を反らすことで回避する。

それが彼らの狙いだった。

「もらった!!!」

如何にフラツシユと言えど、そんな状態で追撃をもらえば無事では済まない。

小太郎と時子が忍者刀とクナイを振り下ろす。

——いいだろう

フラツシユは・・・笑った。

「しかし考えたな。小太郎ではなく小太郎に貼り付けた千里眼からクナイを飛ばすことで俺に悟られないようにしたのか」

「・・・そ、そうだよ」

感心したように頷くフラツシユに小太郎は力なく返す。それもそのはず、今しがたフラツシユの手によって地に叩きつけられたダメージが回復していないのだ。

「まさかあの体勢からも切り返すことが出来るとは。フラツシユ様のその体術、さすがとしか言いようがありません」

肩で息をする小太郎とは対称的に時子も額に汗を浮かべながらも平然としていた。その上でフラツシユの強さを賞賛する。

試合は時子ふうまペアの敗北・・・というより小太郎が戦闘不能になった時点でフラツシユが『止め』をかけたのだ。

(時子もまだ本気を出せてなかった、フラツシユ兄さんも・・・。二人とも俺に合わせてくれてたんだよなあ)

これはあくまで小太郎の訓練。だからこそ本来小太郎の格上である二人が自分に合わせてくれていたのだと、小太郎は自分の実力の無さに歯噛みした。

「そう悔しがるな。お前が勝てないのは俺を相手にした時点で分かっ

ていたことだ。むしろここまで食い下がれたことを誇るがいい」
(くっ、本当のことだから反論しづらい・・・)

フラッシュの上から目線の言葉も事実ゆえに小太郎も押し黙るしかない。しかし実際、フラッシュの本気をほんの一片でも引き出した事に小太郎は自分の影響を感じた。

(お館様が成長しているのは事実です。時子も嬉しい限りです。・・・しかし)

時子も小太郎の成長を執事として、姉として、喜ばしく思っていた。それと同時に――

(やはりフラッシュ様はまだ本気ではありませんね・・・)

フラッシュの本気をまだ引き出せていないことに己の無力さを感じていた。

試合の中、フラッシュと一対一で打ち合う機会があった。しかしその間、自分は本気で打ち込んだにも関わらずフラッシュは最後まで本気を出さなかった。

(お館様の成長もですが、私自身も精進しないといけませんね)

「今日はここまでだ」

「あ・・・」

訓練終了を告げ、その場を去ろうとするフラッシュ。その様子を時子が切なそうに見つめている。

「せつ、せつかくだからさフラッシュ兄さんも飯食べていこうよ!」

しかしそんなフラッシュを止めたのは小太郎だった。何やら大げさなジェスチャーをしながらフラッシュをその場に引き留めている。

「そ、そうですよ! 僭越ながらこの時子、腕によりをかけて料理をふるまいます!」

そしてそこに加わる時子。

やけに必死に自分を引き止める二人にフラッシュは疑問を抱きつつもこれを承諾した。

フラッシュ side

あつぶねええええ!!??

本当にさっきのはヤバかったぞ……思わず速度を上げてしまった。いやはや『弟』の成長にお兄ちゃんも嬉しいぞ、うんうん。

昔のいざこざに巻き込まれた小太郎を影ながら面倒を見ることになつて早10年ほどか。そのうち稽古もつけ始めてから、少し厳しいかと思っていたが小太郎は音をあげずについてきてくれた。

気づけば俺は、小太郎を弟のように扱い、向こうも俺を兄と慕ってくれた。

あの、絵に描いたようなお坊ちやまが今ではそこらの対魔忍にも引けを取らない立派な男になった。

ふうま一族が持つ魔眼に今はまだ目覚めていないが、それを差し引いても小太郎は機知に富んでいる。ゴリラ型脳筋思考が多い、というかそれしかない対魔忍の中でこの能力は本当に貴重かつ重要だ。

それよりも……だ。

何故か小太郎は何かを誤魔化すようにそっぽを向いてるし、執事の時子は何やら熱っぽい視線を送り続けている。

……二人は俺に何をしたいんだ。

あ、そうだ……。

「小太郎」

「え、どうしたフラッシュユ兄さん？」

「お前、俺の知らないうちに『独立遊撃隊』なるものの指揮官になったらしいじゃないか。今度の鍛錬にはその部隊の隊員も連れてこい。せつかくだから噂の部隊の戦闘力を見てみたい」

俺の言葉に小太郎はギョツとした表情を、時子は捨てられた子犬のような顔になる。

いやなんで二人ともそんな顔をするんだ。

「なに、軽く稽古をつけるだけだ。悪いようにはせん」

「……わかった」

(その『軽く』が問題なんだよなあ)

この時、フラッシュユは自らに課す鍛錬の厳しさが周りよりも乖離していた結果、『軽め』でも並の対魔忍なら吐きまくるようなレベルに

なっていることに気づいていなかった。

「あ、あの・・・私は・・・」

「ん？無論、時子も参加してもらうぞ。遊撃隊とは別でな。お前は俺と違って正式な五車学園の教師。監督役としてしつかりしてもらうぞ」

時子の問いかけに応えると嬉しいような残念なような複雑な表情を時子はした。え、仲間はずれにされるのが嫌だったんじゃないのか？

ムーとでも鳴きそうな時子にしては珍しい表情をしているが、なんでそんなことになってるのか皆目見当もつかない。・・・とりあえず

「帰るか」

おい、小太郎。なんだその『やれやれこの人は』みたいな顔は。正直少しピキったぞ。

きつとそれは『一目惚れ』だったのだろう。

絵本に描いたような、お姫様のピンチに颯爽と現れる王子様・・・私にはそう見えた。

あの日、幼き御館様とまだ年端もない私が守られたあの日。

その剣技が、その立ち姿が、その言葉が、その振る舞いがとてもまぶしく見えた。

「フラッシュ様。お慕い申し上げます・・・」

きつとこの声は届かない。届かせてはいけない。わたしはまだあの人に追いついていないのだから。まだ・・・あの日、あの場所に置いていかれたままだから。

でも、いつか追いついた日には・・・。